たじまのくに　おおやしろ
但馬国の大社
養父神社

文化財ミニパンフ

兵庫県登録文化財：本殿・拝殿・山野口神社・五社神社（平成22年３月19日登録）

養父（やぶ）神社は円山川に張り出した台地の上に位置しています。江戸時代から桜の花見の名所として有名な景勝地で、現在は紅葉の名所となっています。付近の山は昭和30年頃まではコウノトリの生息地として有名でした。境内は、入口にある大鳥居から最も奥にある山野口（やまのくち）神社まで、奥行きが南北140ｍあります。そして幅は最も狭い南端部で東西12ｍ、最も広い北端部で65ｍの細長い三角形の敷地となっています。面積は約4300㎡あります。かつては円山川沿いの山陰道から大鳥居まで一直線にのびる参道がありましたが、明治41年の山陰線の開通によって敷地の前方部は削り取られ、参道は西側と東側から階段で入る形になりました。

建物の配置の特徴は、円山川に向かって南北方向に主軸を置いていることです。主軸線上には南から大鳥居、随神門（ずいじんもん）、拝殿、本殿が一直線に並んでいます。そして左側には御霊（ごりょう）神社、五社（ごしゃ）神社、金刀比羅神社があります。そして拝殿の前を西に直角に曲がり、さらに南に進むと山野口（やまのくち）神社があります。この山野口神社の参道に面して、迦遅屋（かじや）神社、厳島神社があります。境内には全部で７社の社殿が建ち並んでいます。山野口神社は狼の社（やしろ）、迦遅屋神社は猫の宮、厳島神社は鯉の宮とも呼んでいます。

養父神社の現在の敷地は延宝（えんぽう）７年（1679）に完成し、現在の御霊神社と随神門が建てられたようです。御霊神社はもともと養父神社の本殿でした。現在の本殿が幕末期に建てられたことから、旧本殿は御霊神社となって現地に移転しました。そして山野口神社、五社神社、金刀比羅神社、迦遅屋神社が改築されています。

養父神社の文化財的な価値は、二つあります。第１は文化11(1814) 年正月16日、伊能忠敬の測量隊が見た建造物が実際に残っていることです。御霊神社・随神門・拝殿の建物です。第２は本殿に豪華な彫刻が多く使われていることです。本殿は大形建造物で、屋根は檜皮葺（ひわだぶき）の屋根をもつ但馬を代表する神社建築です。拝殿の正面には「養父大明神、山野口大明神」という神社の名称額が上げられています。

狛犬と狼像が並ぶ養父神社拝殿

境内の配置と建造物

建　物	規　模	屋　根	備考
養父神社本殿	桁行三間・梁間二間	檜皮葺　入母屋造	正面千鳥破風付
養父神社拝殿	桁行三間・梁間二間	銅板葺　入母屋造	
随神門	一間一戸	銅板葺　切妻造	四脚門
山野口神社	桁行三間・梁間三間	銅板葺　切妻造	正面千鳥破風付
御霊神社	桁行一間・梁間二間	銅板葺　春日造	
五社神社	桁行三間・梁間一間	銅板葺　三間社流造	
金刀比羅神社	桁行一間・梁間一間	銅板葺　一間社流造	
迦遅屋神社	桁行一間・梁間一間	銅板葺　一間社流造	
厳島神社	桁行一間・梁間一間	銅板葺　一間社流造	

御霊神社

山野口神社

五社神社

本殿

金刀比羅神社

厳島神社

迦遅屋神社

随神門

養父神社の境内地　　所在地：兵庫県養父市養父市場 827-3

荘厳なる社　彫刻の豪華な本殿

本殿は大形の建物で、屋根は檜の皮を葺く檜皮葺という伝統工法で作っています。屋根の形態は入母屋造で、棟の上には千木と鰹木という神社建築特有の装飾があります。正面に三角形の千鳥破風、向拝正面に唐破風が付いています。軒は扇垂木に三手先の組物という工法で、見た目も美しく大きく仕上げられています。特に獅子・獏・龍・象などに加えて麒麟・鳳凰・力士・さまざまな鳥など優れた彫刻が豪華に配置され、彫刻師は中井正次と考えています。建物の規模は桁行三間（6.80 m）・梁間二間（3.88 m）で、幅 1.28 mの高欄付き縁が四方に廻っています。

本殿向拝　龍の彫刻

本殿柱　獏の彫刻

古代の養父神社　養父神社に正五位上の神階

養父神社は、奈良時代の但馬国養父郡養父郷に鎮座します。そして郡名を社名にもつ神社として高い格式があります。天平９年（737）に書かれた但馬国正税帳には、朝来郡粟鹿神、養父郡養父神、出石郡出石神などが記録されており、但馬でも最古の記録が残る神社です。さらに貞観 16 年（874）、出石神・粟鹿神・養父神は、但馬国司からの上申によって朝廷からそろって正五位上の神階を授けられました。この三社は、但馬を代表する古い大社と言われています。

また養父神社に近接する養父市場から薮崎付近には奈良時代に養父郡衙が置かれ、養父郡の政治的な中心地として栄えたとする説もあります。養父という地名は、養父市場・薮崎・大薮付近を示す言葉です。

中世の養父神社　朝倉高清が武功を祈願

越前朝倉氏は福井市の一乗谷を本拠として栄えた有名な戦国大名です。養父郡朝倉庄に本拠をおいた朝倉高清は、その初代広景の祖父にあたる人物で、鎌倉幕府の源頼朝に仕えました。伝説では、当時、鎌倉では大きくなると 210cm になる一方で逃げる時には鼠ほどに小さくなる白猪が暴れていました。そこで源頼朝は、朝倉高清にこの白猪退治を命じました。高清は但馬に帰って７日間、養父神社にこもって祈願し、神前から鏑矢をもらい受けました。この矢で白猪を退治して、源頼朝に仕官がかないました。養父神社は朝倉高清が武功を挙げるための一世一代の祈願所となっています。暴れまわる白猪は、狼が守護するという養父神社から授かった神矢の霊力によって退治できたと伝えています。

また養父神社を守るように３件の中世城郭が作られています。弥高山の山頂にある弥高山城、本殿からみて養父市場側の尾根筋にある宮谷東城、薮崎側にある宮谷西城です。養父市を代表する城砦群の一つです。

江戸時代の養父神社　出石藩主の桜の花見

文化 15 年（1818）３月 19 日、出石藩主仙石政美侯は、養父明神の花見に大名行列を従えてやって来ました。総人数は 147 名で、御馬 14 疋が従い、御側衆は残らず乗馬しました。「先例のとおり」と書いてあることから、幾度も参拝しています。

また文政６年（1823）出石藩は家臣たちに通達をだしました。養父明神へ桜の見物に行って、養父市場村に大勢が立ち寄って地元が難儀をしている。養父明神の桜見物に行っても村々へ立ち寄ってはいけないという禁令です。養父神社は、出石城下から多くの武士や町人が花見にやってくる但馬の名所でした。

組物と彫刻の豪華な養父神社本殿

養蚕と養父神社信仰

上垣守国の養蚕秘録

拝殿前の狼像

養父神社に対する信仰を知る資料として、養父市大屋町蔵垣の上垣守国（もりくに）が享和（きょうわ）３年（1803）に出版した養蚕秘録（ようさんひろく）があります。シーボルトが養蚕秘録をオランダに持ち帰り、嘉永（かえい）元年（1848）にパリで農業技術書として翻訳出版された書物です。そこには「この社（養父神社）を養蚕の御神とて、国中の民、糸綿を初穂として捧げ、祈祷なすも宜（むべ）なり。また広前の小石を戴きて帰り、蚕の傍（かたわら）に置きて鼠を除ける守護とする。これを猫石といふ」「この御神は、狼を使令（つかわしめ）とし給ふゆへに、猪鹿でて作物をあらす時、この社に詣で（る）」と書かれています。

養父神社の拝殿の前に、尻尾を高く上げた狼の石像があります。狛犬のように見えますが、明治 26 年（1893）に建立された狼の石像です。口を開けているのが雌で、閉じているのが雄です。日本狼は明治 38 年（1905）に絶滅しましたが、養父神社では石像として残っています。田畑を荒らす猪や鹿から作物を守る益獣として、狼を守り神とする伝承が 400 年以上も昔から伝わっています。

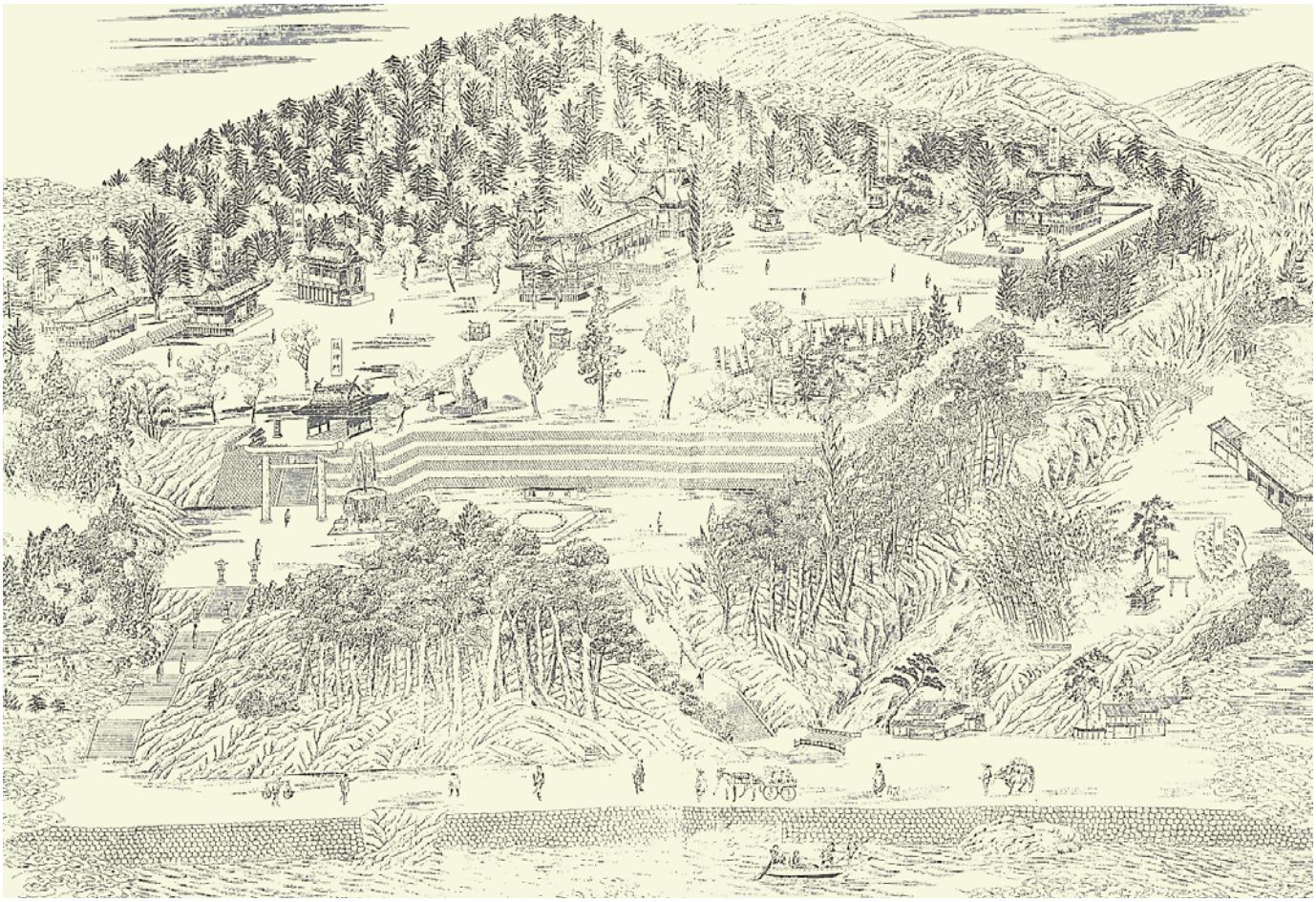
伊能忠敬のみた養父神社

伊能忠敬と養父神社

御霊神社（旧本殿）向拝彫刻

文化 11 年（1814）、伊能忠敬（いのうただたか）は養父市内を測量しました。旧暦の正月 16 日の測量日記には「但馬国養父郡出石領、養父市場村出立。藪（養父）大明神前、〈社〉印迄、五町四十五間。神前迄三十間。式内夜夫坐神社（しきないやぶいます）、当時 曰（いわく） 藪明神」とあります。70 歳の伊能忠敬は真冬の雨の日に、養父神社を訪問しました。さらに「祭神、上社・倉稲魂命（うかのみたまのみこと）・五十猛命（いそたけるのみこと）、中社・少彦名命（すくなひこなのみこと）、下社・谿羽道主命（たにはみちぬしのみこと）・船帆足尼命（ふなほそこねのみこと）」と書いてあります。養父神社の本殿は３社ありました。

江戸時代の養父神社は、標高 372 mある弥高山の山頂に上社、中腹に中社、現在の養父神社の位置には下社を置きました。明治時代初頭に社殿を下社に統合しました。養父神社の信仰はもともと本殿の背後にそびえる弥高山の全体に社殿を配置する山岳信仰でもあります。



養父神社絵図（明治 30 年・養父神社蔵）

編集・発行：養父市教育委員会社会教育課　〒 667-0198　兵庫県養父市広谷 251-1　160130